



# 日本洋書協会

JAPAN ASSOCIATION OF INTERNATIONAL PUBLICATIONS

MAY 2015  
REPORT MAGAZINE

会報誌 | vol. 49 no. 3

Published by JAIP 1-32-5 U.S.P Higashishinagawa Shinagawa-ku, Tokyo 140-0002

Call:03-5479-7269 e-mail:office@jaip.jp

## 理事会報告 2015年4月2日(木)

### 新理事会

出席(敬称略) 相澤、松村、小松崎、細谷、東端、(事務局)

#### 1. 理事長の決定

相澤理事に理事長を、松村理事に副理事長をお願いすることとした。

#### 2. 委員会担当の決定

以下の通りとし、各自で委員会を構成することとした。

総務(相澤) メディア・広報(東端) 文化・厚生(細谷・小松崎) 事業(松村)

#### 3. 2015年度予算

総務委員会案を了承した。

### 理事会

出席(敬称略) 土方、グレシャム、山川、相澤、松村、小松崎、細谷(河村、正田)

#### 1. 決算承認

2015年度の決算内容の説明が事務局からあり、承認された。

#### 2. 退会承認

阪急・阪神エクスプレス、藤井洋書の退会が承認された。

#### 3. 理事長から

各理事に対し、2年に亘る理事会、協会運営の協力に対し謝辞があった。

#### 4. その他

次回理事会は総会当日(5月15日)に行う。

## 海外ニュース

### Global E-book Report 2015で

#### 国別の市場の差が明らかに

オーストリアのコンサルティング会社Rüdiger Wischenbart Content and Consultingが、このほど2015 Global E-book Reportを発表した。それによると、アメリカやイギリスなど英語圏でのe-bookの成長がめざましい一方で、欧州の非英語圏での成長率はごく控えめなものであることが明らかになった。英語圏でのe-bookの売上は、全体の約30%にも上るが、欧州の非英語圏での売上は全体の10%以下にとどまり、フランス1%、ドイツ4.3%、オランダ4.7%などであった。

非英語圏のe-bookの発展は、市場の浸透率という点からも、全体的な市場状況という点から見ても、国によって異なっている。たとえばドイツは、e-bookに積極的で、Amazonもマーケットリーダーとして市場を

けん引している。一方フランスは、e-bookを敵対視しているわけではないが、フランス人の文化的気質としてやや懐疑的な姿勢をとっている。北欧ははじめに公共図書館でe-bookが導入されたので、購買率は低かったが、近年は一定料金での定期購読という形式が受け入れられつつある。中央、東ヨーロッパの小さな国々は、元々大きくない市場での自国語のe-book作成には多大なコストがかかり、それがe-book推進の大きな障害となっている。

Reportは、欧州の非英語圏市場におけるe-bookは低い水準にとどまっておき、今後も急激な成長は見込めないだろうと述べている。しかし業界レベルでの変化は、水面下で確実に進行していこうと見ている。

(The Bookseller Online May 6, 2015より抄訳)

情報提供: U.P.S. 遠藤尚子

## 2014年(平成26年)1月～12月 洋書輸入・輸出統計

藤村 裕二

昨年に引き続き、3月に公表された、直近の2014年の「貿易統計」に関して報告させていただきます。前回もご説明しましたが、このレポートは、財務省(関税局調査課)が毎月発表している「貿易統計」の中の「普通貿易統計」のデータから、絵本を含む洋書と洋雑誌、それに楽譜や地図、カレンダーなどを含む「印刷物」に関する統計を抜き出したものです。「貿易統計」の元データは、<http://www.customs.go.jp/toukei/info/index.htm> から入手できます。

「貿易統計」は、1類の「動物」から97類の「美術品」まで品目毎に細かく分類されていますが、個々の品目は6桁の国際標準コード(H.S. Code)に日本独自の3桁を加えた9桁のコードで表されています。このコードは、通関時の申告書作成等でご存知の方も多いかと思いますが、洋書や外国雑誌は49類の「印刷した書籍、新聞、絵画その他の印刷物並びに手書き文書、タイプ文書、設計図及び図案」という項目に含まれています。49類の中は更に細分化されていますが、個々の品目は本文の各集計表をご参照ください。また、下記のサイトでは統計品目全体の詳細が確認できます。<http://www.customs.go.jp/toukei/sankou/code/code.htm>

それでは、具体的な統計内容に入っていききたいと思います。

## (1) 輸入額

## 1. 書籍・雑誌の輸入額

## 1) 2014年の輸入額(表1)

書籍と雑誌の金額ベースでの構成比はおおよそ80%と20%で、全体としては2013年に比べて約1.5%と僅かな増加となっています。個々の金額では、書籍が5.1%増加したのに対して、雑誌はマイナス12.6%と大きな減少となっています。一方で、2013年と2014年の為替相場の動きを見てみますと、年間平均レートがドルとユーロそれぞれで約8%の円安となっていますので、単純に考えれば、原価が変わらなかったとしても、輸入金額は増えるはずですが、統計に現れている金額(円)からは分かり難い原価ベースでの輸入額の減少(特に雑誌に関して)があったものと思われます。この点については「為替」の項目で改めて触れたいと思います。

(表1) 2014年の書籍・雑誌関連品目の輸入額

(単位: 百万円)

分類	品目	2013 輸入額	2014 輸入額	前年比	構成比
印刷した書籍、 小冊子、リーフレット その他これらに類する印刷 物および絵本	単一シートのもの	680	850	125%	2.6%
	辞典および事典	78	73	94%	0.2%
	その他のもの(書籍)	21,845	22,277	102%	68.2%
	幼児用の絵本及び 習字本	3,111	3,814	123%	11.7%
	小計	25,714	27,014	105%	82.7%
新聞、雑誌その 他の定期刊行 物	1週に4回以上発行 するもの	5	1	20%	0.0%
	その他のもの	6,444	5,635	87%	17.3%
	小計	6,449	5,636	87%	17.3%
	合計	32,163	32,650	102%	100.0%

## 2) 最近10年間の輸入額の推移(表2)

2005年から2014年の10年間の推移を見てみると、長期的な輸入額の落ち込みが顕著に表れているのが分かります。2005年の輸入額を100とした場合、2014年は65と大きく減少していますが、個々に見ると書籍が78とやや緩やかな減少だったのに対して、雑誌は37と急激な減少となっています。世間で言われている本離れが洋書の世界でも進んでいるということかと思いますが、雑誌に関してはやはり「電子化」も大きく影響しているのではないかと思います。前項で述べた2014年の輸入額と同じく、為替の影響以上に、10年というスパンでは原価ベースでも減っているものと推測されます。

(表2) 最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸入額の推移

(単位: 百万円)

品目	印刷した書籍、小冊子、リーフレットその他これらに類する印刷物および絵本					新聞・雑誌			合計								
	単一シート		辞典・事典		その他(書籍)		絵本		小計		新聞・雑誌		合計				
	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	輸入額	前年比	対2005	輸入額	前年比	対2005			
2005	337	119%	241	76%	30,111	92%	4,078	109%	34,767	94%	100	15,353	105%	100	50,120	97%	100
2006	173	51%	154	64%	30,787	102%	4,546	111%	35,660	103%	103	16,259	106%	106	51,919	104%	104
2007	307	177%	128	83%	29,580	96%	5,066	111%	35,061	98%	101	15,824	97%	103	50,905	98%	102
2008	242	79%	179	140%	26,327	91%	3,881	77%	31,229	89%	90	13,300	84%	87	44,529	87%	89
2009	221	91%	74	41%	22,920	85%	2,798	72%	26,013	83%	75	10,962	82%	71	36,975	83%	74
2010	257	116%	107	145%	22,646	99%	2,636	94%	25,646	99%	74	9,137	83%	60	34,783	94%	69
2011	469	182%	55	51%	21,643	96%	2,915	111%	25,082	98%	72	7,165	78%	47	32,247	93%	64
2012	664	142%	64	116%	19,997	92%	3,072	105%	23,797	95%	68	5,983	84%	39	29,780	92%	59
2013	680	102%	78	122%	21,945	109%	3,111	101%	25,714	108%	74	6,449	108%	42	32,163	108%	64
2014	850	125%	73	94%	22,277	102%	3,814	123%	27,014	105%	78	5,636	87%	37	32,650	102%	65

3) 主要国・地域別の2014年と2013年の輸入額

次に、国別の輸入額について見ていきます。上位10カ国では昨年11位のマレーシアが10位に上がり、10位のイタリアが11位に下がっています。(表3-a) この10ヶ国で書籍は輸入総額の95%、雑誌は97%を占めており、輸入先が上位の国々に固定化している状況です。また、上位10ヶ国の2014年の輸入額は2013年に比べて、書籍が4.9%増、雑誌が12.6%減ですが、総額では1.3%増とほぼ横ばいとなっています。

11位～30位の国々(表3-b)に関しても若干の順位の入替わりがありました。昨年31位以下だった、ポーランド、フィンランド、ハンガリーの3ヶ国が30位内に入り、一方でカンボジア、ニュージーランド、デンマークの3ヶ国が31位以下となりました。輸入総額に対するこれらの20ヶ国の構成比は5%程度ですが2013年の輸入額に比べると上位10ヶ国を上回る10.5%の増加となっています。

また、地域別の輸入額に関しては、米国と英国に加えてユーロ圏(19ヶ国)、東アジア(中国、香港、台湾、韓国)、東南アジア(ASEAN10ヶ国+インド、パキスタン、ネパール)の輸入金額を集計しています。(表3-c) この中では特に、東アジア各国からの輸入が増えているようです。

尚、この集計は主に輸入額の国別の順位を相対的に見るためのものですので、為替の影響は考慮する必要はないと思います。

(表3-b) 2014年の書籍・雑誌輸入額の11位～30位の国々

(単位 百万円)

順位	品目 国名	2013年実績		2014年輸入額			前年比
		金額	順位	書籍	新聞・雑誌	合計	
1～10	上位10ヶ国合計	30,707	(1～10)	25,635	5,469	31,104	101%
11	イタリア	302	10	178	116	294	97%
12	台湾	251	12	238	22	260	104%
13	ブラジル	151	14	139	21	160	106%
14	ベルギー	27	22	150	1	151	559%
15	タイ	164	13	118	0	118	72%
16	スイス	114	15	112	2	114	100%
17	アイルランド	80	16	109	0	109	136%
18	カナダ	37	20	63	0	63	170%
19	インド	56	17	41	0	41	73%
20	ポーランド	6	32	26	0	26	433%
21	ベトナム	11	27	26	0	26	236%
22	スペイン	12	26	24	1	25	208%
23	スウェーデン	48	18	21	1	22	46%
24	ロシア	19	23	22	0	22	116%
25	フィリピン	11	28	14	0	14	127%
26	オーストリア	31	21	13	0	13	42%
27	インドネシア	14	24	11	0	11	79%
28	ハンガリー	1	48	11	0	11	1100%
29	オーストラリア	14	25	9	2	11	79%
30	フィンランド	6	33	8	0	8	133%
小計		1,355	----	1,333	166	1,499	111%
その他の国々		102	----	45	2	47	46%
合計		32,164	----	27,013	5,637	32,650	102%

(表3-c) 2014年の米国・英国と地域別の書籍・雑誌の輸入額

(単位 百万円)

品目	国名						合計
	米国	英国	ユーロ圏	東アジア	東南アジア	その他の国々	
書籍類	7,404	5,483	3,268	9,393	1,028	437	27,013
雑誌類	2,668	1,151	1,158	367	267	26	5,637
合計	10,072	6,634	4,426	9,760	1,295	463	32,650
2014年構成比	31%	20%	14%	30%	4%	1%	100%
前年比	96%	99%	98%	112%	96%	106%	102%
2013年実績(合計)	10,487	6,687	4,498	8,705	1,348	438	32,163
2013年構成比	33%	21%	14%	27%	4%	1%	100%

(表3-a) 2014年の書籍・雑誌輸入額の上位10ヶ国

(単位 百万円)

順位	品目 国名	書籍・辞典・絵本				新聞・雑誌・その他定期刊行物				合計			
		2013	2014	前年比	構成比	2013	2014	前年比	構成比	2013	2014	前年比	構成比
		1	米国	7,279	7,404	102%	27%	3,208	2,668	83%	47%	10,487	10,072
2	中国	6,325	7,208	114%	27%	112	84	75%	1%	6,437	7,292	113%	22%
3	英国	5,704	5,483	96%	20%	983	1,151	117%	20%	6,687	6,634	99%	20%
4	ドイツ	1,796	1,922	107%	7%	36	27	75%	0%	1,832	1,949	106%	6%
5	韓国	1,139	947	83%	4%	229	166	72%	3%	1,368	1,113	81%	3%
6	香港	545	1,001	184%	4%	103	94	91%	2%	648	1,095	169%	3%
7	オランダ	119	96	81%	0%	1,194	885	74%	16%	1,313	981	75%	3%
8	フランス	762	757	99%	3%	125	127	102%	2%	887	884	100%	3%
9	シンガポール	516	474	92%	2%	263	267	102%	5%	779	741	95%	2%
10	マレーシア	262	343	131%	1%	5	0	0%	0%	267	343	128%	1%
小計		24,447	25,635	105%	95%	6,258	5,469	87%	97%	30,705	31,104	101%	95%
その他の国々		1,265	1,378	109%	5%	191	168	88%	3%	1,456	1,546	106%	5%
合計		25,712	27,013	105%	100%	6,449	5,637	87%	100%	32,161	32,650	102%	100%

2. 書籍・雑誌以外の品目の輸入額

表4は、49類に含まれる品目のうち、前段の書籍や雑誌以外の品目についての集計です。印刷物と言っても、設計図やデカルコマニアといった、洋書業界とはあまり縁のない品物も含まれています。10年前(2005年)と比べて大幅に増えていますし、金額的には書籍・雑誌に比べてかなり大きなものですが、49類に定められた品目の中に分類できない雑多なもの、「その他の印刷物」の中の「その他のもの」(残念ながら具体的な内容は不明です)が多い状況です。

(表4) 2014年の書籍・雑誌以外の印刷物の品目別輸入額

		(単位 百万円)				
品目	内訳	2013年 輸入額	2014年 輸入額	前年比	2005年 輸入額	2005年 との比較
楽 譜		418	484	116%	742	65%
地図、海図、地球儀		1,024	985	96%	964	102%
設計図及び図案		72	40	56%	952	4%
郵便切手・収入印紙など		12,379	13,134	106%	9,796	134%
デカルコマニア(※)		1,312	1,437	110%	888	162%
葉書、印刷したカードなど		2,567	2,596	101%	1,558	167%
カレンダー	紙製または板紙製	2,822	2,957	105%	2,908	102%
	その他のもの	82	108	132%	151	72%
	小計	2,904	3,065	106%	3,059	100%
その他の 印刷物	広告、商業用カタログ	9,880	9,305	94%	8,325	112%
	写真	2,265	2,239	99%	2,285	98%
	絵画、デザイン	1,405	1,839	131%	2,414	76%
	その他のもの	52,670	80,321	152%	16,747	480%
	小計	66,220	93,704	142%	29,771	315%
合 計		86,896	115,445	133%	47,730	242%

※デカルコマニア:転写印刷の技法そのものやこの転写に使う印刷された特殊な紙(原版)のこと。

## (2) 輸出額

2014年の書籍・雑誌の輸出額(表5-a)は2013年と比べて約1.2%と僅かな増加となっています。ただし、輸出決済に使用される通貨の比率は、直近の集計で、米ドルが54%、円が35%、ユーロが6%と、3通貨合わせて95%を占めており、更に2014年は2013年に対してドル、ユーロとも約8%の円安となっていますので、原価ベースでは横ばいではないかと推測されます。また、輸入と異なり、最近10年間の輸出額の推移も、若干の上下はありますが、ほぼ横ばいと見ることができると考えられます。(表5-b)合わせて、最近10年間の書籍・雑誌の輸入額と輸出額の比率の推移を見ますと、概ね輸入7に対して輸出3という状況が続いています。(表6)

(表5-a) 2014年の書籍・雑誌関連品目の輸出額

		(単位:百万円)			
分類	品目	2013 輸出額	2014 輸出額	前年比	2014 構成比
印刷した書籍、 小冊子、リーフレットそ の他これらに 類する印刷物 および絵本	単一シートのもの	1,697	1,488	88%	9.5%
	辞典および事典	63	15	24%	0.1%
	その他のもの(書籍)	10,394	11,248	108%	71.7%
	幼児用の絵本及び習字本	49	48	98%	0.3%
	小計	12,203	12,799	105%	81.6%
新聞、雑誌 その他の 定期刊行物	1週に4回以上発行するもの	5	2	40%	0.0%
	その他のもの	3,301	2,891	88%	18.4%
	小計	3,306	2,893	88%	18.4%
合 計		15,509	15,692	101%	100.0%

(表5-b) 最近10年間の書籍・雑誌関連品目の輸出額の推移

		(単位 百万円)								
品目	年度	書籍・辞典・絵本			新聞・雑誌・ その他定期刊行物			合 計		
		輸出額	前年比	対 2005	輸出額	前年比	指 数	輸出額	前年比	対 2005
	2005	10,342	91%	100	4,587	102%	100	14,929	94%	100
	2006	11,159	108%	108	4,580	100%	100	15,739	105%	105
	2007	11,831	106%	114	4,810	105%	105	16,641	106%	111
	2008	10,816	91%	105	4,717	98%	103	15,533	93%	104
	2009	11,358	105%	110	4,593	97%	100	15,951	103%	107
	2010	14,425	127%	139	4,974	108%	108	19,399	122%	130
	2011	10,608	74%	103	4,305	87%	94	14,913	77%	100
	2012	9,933	94%	96	3,609	84%	79	13,542	91%	91
	2013	12,203	123%	118	3,306	92%	72	15,509	115%	104
	2014	12,800	105%	124	2,892	87%	63	15,692	101%	105

(表6) 最近10年間の書籍・雑誌の輸出入額比率の推移

		(単位 百万円)			
年度	輸出入	輸 入		輸 出	
		金 額	比 率	金 額	比 率
2005		50,120	77%	14,929	23%
2006		51,919	77%	15,739	23%
2007		50,904	75%	16,641	25%
2008		44,529	74%	15,533	26%
2009		36,975	70%	15,951	30%
2010		34,783	64%	19,399	36%
2011		32,247	68%	14,913	32%
2012		29,780	69%	13,542	31%
2013		32,163	67%	15,509	33%
2014		32,650	68%	15,692	32%

## (3) 為替

為替は外国との商取引において、そのビジネスの結果を左右する大きな要素の一つと言えます。表7はここ5年間の主要4通貨のレートの変動を示したものです。対象通貨は、財務省が半年毎に発表している「貿易取引通貨別比率」においてほぼ99%を占める5通貨から円を除いた4通貨です。(中国人民元は2013年に初出のため除外しています)表からは、当初の円高傾向が、アベノミクスや日銀の異次元緩和によるものかも知れませんが、2013年には大きく円安に転じていることが確認できます。

「貿易統計」は、財務省(税関)が公示したレート(「税関長公示レート」)によって外貨から換算した円貨の金額にもとづいて集計されていますので、表面的には為替の影響が見えにくい状況となっています。つまり、統計に現れる金額の変化は、原価の増減(原価の値上がりも含めて)による部分と為替レートの変動による部分が合算されたものであるため単純な動きとしては捉えられないという状況があります。

こうした為替の動きが貿易統計にどのような形で反映しているのかを見るための一つの方法として、「貿易取引通貨別比率」をもとに、年度毎の通貨別の輸入額(円)を算出し、更にその年度の平均為替レートから輸入原価(計算原価)を算出してみました。

表8は、この輸入額と輸入原価（計算原価）に、「貿易取引通貨別比率」を加味した対前年比の加重平均値を加えたものです。あくまでも計算上の数値であり、参考値として見ていただければと思います。貿易統計の輸入額と原価の変動の違いが確認できるかと思えます。例えば2014年は2013年に比べて単純な輸入額（円）は1.02と増加していますが、原価（加重平均）では0.95と減少していることが確認できます。更に、2013年では輸入額が1.08と伸びているのに対して原価は0.92と大きく減っています。このように、輸入額が増えたと言っても円安の影響が大きく、実態としては原価は減っているものと推測できます。前段で、2014年の輸入額が原価ベースでは減少しているのではと推測しましたが、この表の数値が一つの根拠になるかと思えます。

ついでながら、最近何かと話題になっている「貿易赤字」に関連して、「国際収支統計」についても簡単に触れてみたいと思います。このレポートでは、最初に述べました通り、財務省が発表している「貿易統計」（「普通貿易統計」）のデータを対象にしています。この「貿易統計」に対して、同じく財務省が発表している「国際収支統計」の一項目である、「貿易収支」は「貿易統計」を基礎資料として作成されていますが、両者にはいくつかの点で相違があります。

そもそも、「国際収支統計」とは、「一定の期間における居住者と非居住者の間で行われたあらゆる対

外経済取引を体系的に記録した統計です。」（財務省資料より抜粋）、と位置付けられており、いくつかに分かれた項目のうちよく話題になるのが「経常収支」です。（他に、「資本移転等収支」や「金融収支」があります）「経常収支」は更に「貿易収支」や「サービス収支」、等に分かれており、良くニュースで取り上げられる「経常収支が黒字…」とか「貿易収支が赤字…」というのはこの部分の統計結果についての報道ということになります。

「貿易収支」と「貿易統計」の相違点ですが、大きくは、集計に使う建値と数値の計上のタイミングの違いにあります。「貿易収支」は物とサービスの取引を区別して計上されるため、輸出入ともFOB（本船渡し条件）で集計され、輸出入の際の運賃や保険料、諸経費は「サービス収支」として計上されます。一方、「貿易統計」は、輸出はFOB、輸入はCIF（運賃・保険料込み条件）で集計されます。また、「貿易収支」が「所有権が移転した時点」で計上されるのに対して、「貿易統計」は、輸出は、「積載船舶等が出港した時点」、輸入は、「輸入許可の時点」で計上されます。因みに、財務省が3月に発表した2015年1月の「国際収支速報」では、「貿易収支」が8642億円の赤字輸出6兆3324億円に対して輸入7兆1966億円であったのに対し、「経常収支」全体では、「貿易収支」や「サービス収支」以外で黒字があり、614億円の黒字となったとのことです。

(表7) 主要通貨の為替レートの変動

通貨	年平均レート											
	2010			2011			2012		2013		2014	
	TTS	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	TTS	前年比	対2010		
米ドル(USD)	88.81	80.84	91%	80.82	100%	98.65	122%	106.85	108%	120%		
米ドル税関レート	88.09	79.97	91%	---	---	---	---	---	---	---	---	
ユーロ(EUR)	117.89	112.62	96%	104.13	92%	131.18	126%	141.92	108%	120%		
ユーロ税関レート	117.25	111.38	95%	---	---	---	---	---	---	---	---	
英ポンド(GBP)	139.60	132.06	95%	130.49	99%	156.70	120%	178.21	114%	128%		
スイスフラン(CHF)	85.07	91.10	107%	86.06	94%	106.25	123%	116.52	110%	137%		

(注1) 対象通貨は財務省発表が発表している「貿易取引通貨別比率」（輸入金額比率）の円を除く上位4通貨（ただし、中国人民元は2013年以降の実績のため除く）

(注2) レートは、三菱東京UFJ銀行が発表している各通貨の月中平均相場の単純平均

(注3) 税関レートは、通関時に使用する「税関長公示レート」の年加重平均レート（2012年以降は集計されていない）

(注4) 前年比が100%以下の場合は円高、100%以上の場合は円安となる。

(表8) 書籍・雑誌の通貨別輸入額と計算原価の推移および「貿易取引通貨別比率」にもとづく対前値加重平均

(単位: 百万円または各1000通貨)

年度	2010		2011			2012				2013				2014				
	金額	原価	金額	対前	原価	対前												
合計	34,783	***	32,247	0.93	***	***	29,780	0.92	***	***	32,163	1.08	***	***	32,650	1.02	***	***
米国ドル	24,939	283,113	23,298	0.93	291,340	1.03	21,769	0.93	269,354	0.92	23,897	1.10	242,241	0.90	24,079	1.01	225,357	0.93
円	8,209	8,209	7,465	0.91	7,465	0.91	6,686	0.90	6,686	0.90	6,626	0.99	6,626	0.99	6,742	1.02	6,742	1.02
ユーロ	1,113	9,493	1,016	0.91	9,120	0.96	879	0.86	8,437	0.93	1,094	1.24	8,336	0.99	1,159	1.06	8,167	0.98
英国ポンド	104	747	64	0.62	488	0.65	60	0.92	456	0.93	32	0.54	205	0.45	0	0.00	0	0.00
スイスフラン	122	1,431	97	0.79	1,062	0.74	89	0.92	1,038	0.98	113	1.26	1,059	1.02	131	1.16	1,121	1.06
その他	296	***	306	1.04	***	***	298	0.97	***	***	402	1.35	***	***	539	1.34	***	***
加重平均	***	***	***	0.93	***	1.00	***	0.92	***	0.92	***	1.08	***	0.92	***	1.02	***	0.95

(注) 「貿易取引通貨別比率」は貿易取引(輸入)全体の金額ベースの比率で、貿易統計に計上されたデータのうち貿易取引通貨が判明しているデータにもとづいて作成されています。

(表9) 国公私立大学における図書館資料費に占める海外出版物の購入金額の推移

(単位: 百万円)

媒体	年度	平成21(2009)年		平成22(2010)年		平成23(2011)年		平成24(2012)年		平成25(2013)年		平成26(2014)年		
		金額	対前	金額	対前	対2009								
冊子	洋書	9,087	90%	8,818	97%	8,019	91%	7,560	94%	7,409	98%	7,231	98%	80%
	外国雑誌	17,762	89%	14,751	83%	12,599	85%	11,473	91%	10,060	88%	9,928	99%	56%
	合計	26,849	90%	23,569	88%	20,618	87%	19,033	92%	17,469	92%	17,159	98%	64%
電子	電子ジャーナル	17,500	118%	18,992	109%	19,680	104%	20,821	106%	21,832	105%	23,609	108%	135%
	電子書籍	---	---	---	---	455	---	470	103%	640	136%	615	96%	---
	DB	---	---	---	---	3,181	---	3,421	108%	3,559	104%	4,164	117%	---
	合計	17,500	118%	18,992	109%	23,316	123%	24,712	106%	26,031	105%	28,388	109%	162%
合計	44,349	99%	42,561	96%	43,934	103%	43,745	100%	43,500	99%	45,547	105%	103%	
その他(参考)	7,140	102%	7,827	110%	3,560	45%	3,255	91%	3,167	97%	2,837	90%	40%	
図書館資料費総額	74,461	100%	73,782	99%	71,551	97%	70,518	99%	69,547	99%	70,554	101%	95%	

(注) 数値は、文部科学省の「学術情報基盤実態調査」の結果報告にもとづく

## (4) 参考資料

最後に、昨年ご紹介しました文部科学省が発表している「学術情報基盤実態調査」の数値を参考までにご覧いただければと思います。表9は平成26年度までの、洋書と外国雑誌、電子ジャーナル、電子書籍(e-Book)等の図書館資料費の集計です。年度はあくまでも調査年度で、実際に購入した年度とは異なりますので傾向として捉えていただければと思います。やはり冊子から電子への移行の顕著な実態が確認できますし、書籍や雑誌の輸

入額が年々減少している状況を裏付けるデータの一つとしても見ることはできないのではないのでしょうか。尚、平成26年度のデータは以下のサイトでご覧いただけます。[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/houdou/27/03/1356099.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/03/1356099.htm)

以上、2014年の貿易統計について、簡単ではありますが、報告させていただきます。不明な点や誤り、ご意見等がありましたら事務局までご一報いただければ幸いです。

## ● お知らせ ●

## ■ 退会 (3月31日付)

- ・(有)藤井洋書(正会員)
- ・(株)阪急阪神エクスプレス(賛助会員)
- ・伸興通商(株)(正会員)
- ・(有)アユソフト(賛助会員)

## ■ 各委員会の委員長が決まりました。

- 総務委員会: 滑川 信行 (極東書店)
- メディア・広報委員会: 松野 夏生 (雄松堂書店)
- 事業委員会: 奥村 尚史 (センゲージ ラーニング・再任)
- 文化・厚生委員会: 鶴 竜次 (東亜ブック・再任)

# The London International Book Fair 2015

There were a LOT of people at this year's LIBF . . . and I knew some of them. I had appointments with more than 30 and ran into many more while wandering the corridors looking for those first 30. Running into people was the easy part; trying to find anything that wasn't in Hall 6 or Hall 7 proved a little more difficult, especially when the apron-balconies above both Halls 6 and 7 were considered separate halls with their own numbering system. Still, even though I was initially confused I never missed an appointment and somehow even managed to add in another 3 or 4 to what I thought was an already-full schedule when somebody I ran into just had to have a 5 or 10 minute chat. One of my scheduled appointments took place in a quiet corner where the oversized trash barrel made a perfect table to open up my notebook and take down some important information. And many thanks, too, to The Emirates Center for Strategic Studies and Research for lending me an unused table at their large stand where I and two others could actually rest our cups of coffee while chatting about the publishing plan for the second half of this year!

I've often wondered about what "other" people talk about at those meetings. Do the conversations focus on the printed word? The latest in Shakespeare, Asian economics and medieval studies? Those are certainly what my conversations were about. It would seem that the message has not only been delivered but has been understood that Japan's academic "book" market is still very much a print-based market and not the great opportunity for digital offerings that perhaps other markets are. Sure, journals and databases are primarily delivered in "e" form here but the dream that students, professors and researchers in Japan would all be reading textbooks and research monographs from Kindles or iPads as quickly and as easily as perhaps they might elsewhere seems to have been tempered. The publishers I spoke with were much more interested in whether the market for printed books continues to decline, stabilize, or find pockets of growth.

Like last year, there continues to be concern over the effects of the weakened Yen against the Dollar and the Pound. In the past it was often the case that a drop in a publisher's sales to one importer in Japan would be balanced by a rise in the sales to another.

But more than once I was told that the drop in 2014 was across the board - total sales to Japan are down and the question was will they recover? Where I could point to a rise in our purchases in 2014 over 2013 it was usually due to a specific



title or set of titles that were particularly appropriate to this market - a point that needs to be emphasized to academic publishers for whom Japan is important but not necessarily the main market for which they publish. The days of selling hundreds of sets of "major works" based on journal articles thematically selected and edited are long gone but the need for solid research monographs or original works of reference - "handbooks" and "companions" - is still very real. When publishers devalue these in favor of short-form (120-150 page) "Introduction to . . ." or "The Essential . . ." because these sell well in their home markets we in Japan have fewer titles to choose from and ultimately fewer titles to sell. The same is even truer when publishing moves away from "academic" to "trade-academic" or even just "trade", where the market is understood to be an educated general readership . . . these don't appeal to Japan's institutional market and Japan's very well-educated general readership generally reads in Japanese and not in English. It's important to make these points so that publishers understand that responsibility for falling sales is a shared concern.

London, like Frankfurt, is a place where years of built-up relationships and trust allow both publishers and booksellers to air their concerns, hopes and thoughts about the future. Email and Skype have their place in the business world of the 21st century but nothing beats a cup of coffee with friends and associates on the stand - even if that stand might not be either yours or theirs!

Mark Gresham (United Publishers Services Limited)



おかげさまで

65th

6月15日、ユサコは  
元気に創業65年を迎えます。

創業1950  
ユサコ株式会社

PROGRESSIVE CHANGE IS OUR WAY OF LIFE

<http://www.usaco.co.jp/>

日本洋書協会会報 vol.49 No.3(通算534号) 発行日2015年6月1日 編集者 平野 覚

発行所 日本洋書協会 〒140-0002 東京都品川区東品川1-32-5 U.P.S. 内 TEL 03-5479-7269 FAX 03-5479-7307

URL:<http://www.jaip.jp> E-mail:[office@jaip.jp](mailto:office@jaip.jp)